



Good Job! Document

「福祉」と「仕事」の
これからの関係づくり

Vol. 01

2013. October

Contents:

Good Job! Collaboration

File 01

Tabio × H TOKYO × Able Art Company

File 02

サヌイ織物 × NPO法人まる

Good Job! RECOMMEND

01 ゴミコロリ / 02 special mix

BOOK REVIEW

SELECTOR:水野大二郎

福祉、企業、NPO、自治体、研究機関など各分野の専門家が手を組み、新しい仕事をつくり出す「Good Job!」。「Good Job! Document」は、そういった「Good Job!」の思想・活動を広く伝えることを目的に生まれました。「Good Job!」から生まれたプロダクトを中心に、そこに込められた想いやプロセスを紹介。企画・製造・流通など商品開発に携わる、さまざまなプロフェッショナルの言葉を通して、これからの「仕事」「ものづくり」「福祉」のあり方、可能性について探ります。



File 01

障害者アートの商品化とトリプルコラボの実現

Tabio

靴下専門店

×

H TOKYO

ハンカチ専門店

×

Able Art Company

アートマネジメントオフィス

創業45周年を迎える老舗靴下専門店・Tabio、メンズメインのセレクションを行うハンカチ専門店・H TOKYO、そして障害のあるアーティストの作品をデザインに活かすことで仕事につなげるAble Art Companyの三者によるトリプルコラボ商品が実現。今回、H TOKYO制作のデザインが靴下にも活かされ、共通デザインのハンカチ、靴下として2013年9月より販売されました。



これが原画!



作・太田宏介

これが原画!



作・養田利博

▲ハンカチと靴下各6種を共通のデザインで商品化。5名の作家による《パオストラップ》、《22.67.83Tシャツ》、《カタツムリ》、《グルクン》、《ディーゼル機関車牽引の貨車》、《ガイコツ》のイメージがモチーフとして用いられています。

photo: Kouda Masahiro

異例のトリプルコラボレーション!

八巻さん、岡崎さん、山口さん、 どうやって実現したんですか?



タビオ株式会社 メンズ営業部係長
八巻誠さん

Tabioの営業として、メンズチームに所属。2008年からエイブルアート・カンパニーとのコラボ商品に携わる



H TOKYO デザイナー
岡崎伊都子さん

H TOKYOのデザイナーとして、2011年からエイブルアート・カンパニーの商品企画に携わる



エイブルアート・カンパニー東京事務局スタッフ
山口里佳さん

エイブルアート・カンパニー東京事務局として2007年の設立当初から営業窓口として携わる

—TabioとH TOKYO、Able Art Company (以下、AAC)のトリプルコラボレーションによって生まれた靴下とハンカチ。異なる分野で活動する企業が手を組み、商品が実現しました。今回、その過程やAACとの協働をふりかえり、それぞれが開発に込めた想いをお聞きました。

Q1

今回のトリプルコラボレーションのきっかけを教えてください。

八巻:「伊勢丹新宿メンズ館」様が取り組む「ART CONNECT by ISETAN MEN'S」がきっかけです。伊勢丹新宿メンズ館では、2010年より取引メーカーへ企画提案を行い、AACの作品を使用した商品開発を進めていますが、その取り組みに、H TOKYOさんも参加していました。これまで、それぞれがAACとのコラボを行っていましたが、**同じデザインになったらおもしろいのではという考えから、今回はじめて三者のコラボレーションが実現したんです。AACと**

は、オリジナル靴下製作で依頼を受け、2008年から一緒に取り組んでいます。

山口:そうですね。これまで作品を商品化しようとすると、Tシャツやトートバッグ、書籍の装丁など、平面のものへの展開が多く「**これまで見たことのない靴下をつくりたい!**」と相談したのがタビオさんと仕事をするきっかけでした。

八巻:その背景には、弊社の会長が、AACの事務局である「たんぼの家」主催の音楽祭に感銘を受け、長年にわたり支援させていただいていたという経緯もあります。僕は、絵心は無い方なんですが、作品の原画を見ているうちに感動してしまって、今では社内でも旗を振って活動しています(笑)。

岡崎:私はデザイン担当として、関わっています。今回のプロジェクトでは、タビオさんとメーカーを超えての異例のコラボになりましたが、共感できることも多く、すんなりと進んでいきましたね。

岡崎：ハンカチをデザインするとき、だいたい2パターンの方をとりまします。ひとつは、原画を組み合わせて1枚の絵をつくる方法、もうひとつは原画をぐっとトリミングする方法。お客様がお店でハンカチと出会うとき、折りたたんでいることが多いので、その状態からも「この柄はなんだろう？」と思ってもらえるデザインを心がけています。

八巻：店頭での出会いは、大事ですね。私たちは、仕上がったデザインをどれだけ綺麗につくり込むことができるかという点にこだわっています。靴下は編み物なので、どうしてもプリントの際に色ムラが出るんですね。いつも工場の方とも相談しながら、試行錯誤を繰り返しています。

山口：仕上がりの美しさには、とても定評があります。AACでは、「いかに作家の表現が活きるか」を大事にしながら企業と作家の間に立って調整しています。私たちは、「仕事をつくっていくこと」が仕事。企業からは5%の著作権使用料をいただき、作家に還元しています。ものやことを通して、次の可能性を感じられる状況をつくりたいですね。

山口：想像もつかないデザインが仕上がってくるのは、すごくワクワクしますね。やはり新たなプロダクトへと展開するためには、デザインや流通の専門家と一緒にものづくりに取り組むことで可能性が広がるのだと実感しました。仕上がった商品を見ると「この原画が、こんな素敵な商品になるんだ！」とうれしい驚きでいっぱいです。

岡崎：AACのWebサイトにアップされている原画から絵柄を選ぶのですが、私にとっては宝の山(笑)！毎回「あんな線や色が描けるんだ」と驚かされています。原画を見てそこから、どう組み合わせようかと楽しく考えていますね。出来上がったときに「これが、あの原画?! かわいい!」と言っていただけののがうれしくて。

山口：AACでは、デザインの可能性を制限しないように、作家とは作品を自由に使わせてもらうという契約を結んでいます。もちろん、出来上がってきた商品のデザインが作品と大きく変わるときには、事前に作家や支援者に確認をしています。

八巻：AACさんとのコラボをきっかけに、間口が広がっていくことの可能性を感じています。2010年からこれまでに110種類ほどのデザインを商品化してきました。今後も商品をきちんとお客さまのもとへ届けて、この企画を継続していくことが大事。今回のトリプルコラボのような話が広がって、何かまた異なるかたちでビジネスにもつなげることができたらおもしろいですね。

八巻：社内では「八巻さん、今度の商品もかわいいですね!」とすれ違いざまに声をかけられるくらい、反応が良いですね。お店のスタッフやお客様も、「次のシリーズは、いつ発売ですか?」と毎回楽しみに待っていてくださっていて、すごくうれしいです。

岡崎：そうですね。私も、北海道のお客様から「お花とドクロ柄のハンカチを落としてしまったんです。けど、どうしてもほしいので、どこかで買えませんか?」とお問い合わせをいただいたことがありました。けど、すでに生産終了していて……。それでも、「そこまで言っていただけののなら!」となんとか探し出したことがありました。

山口：作家やそのご家族も、商品が売り場に並んでいる様子を見て、モチベーションが上がるようです。自分のつくったものが誰かの手に届くというのはやっぱり感慨深いですね。それは彼らのアートを守ってきた、周りの人による支援の成果でもありますし、彼らをさらに支えていこうという気持ちにもつながっていくんだと思うんです。

八巻：まずは、これをちゃんと継続していくことが大事だと思っています。そうすることで、何か違うかたちでビジネスにつながることもあるでしょうし、さらに間口を広げていくことが可能になると思うんです。

岡崎：私たちも同じ想いで、続けていきたいと思っています。作品もどんどん新しいのが出てきますし、作り手としては、やっぱりそれを世に出したい。せつかくの縁ですから、ハンカチ屋ができることで、お客様や作家さんたちに喜んでほしいです。

山口：もっとAACの作家や仕組みをたくさんの人に知ってもらいたいです。作家の魅力を紹介して、仕事につなげることが私たちの仕事。メーカーさんは売って伝える。お互いが共存しながらも、リスペクトしあい、ビジネスにつなげる仕事の仕組みがこれから先、一番理想だなと感じています。そういった状況も含めて、ものづくりをしていきたいですね。

Good Job! 実現のポイント

1. 出会うきっかけを新たなチャンスとして挑戦してみると。
2. 理想の仕上がりを実現せず、それぞれの専門家のこだわりを。
3. お互いの強みを活かして、ビジネスとして発展させること。

Tabioの靴下は作家タグつき!



エイブルアート・カンパニーとのコラボ靴下には、登録アーティストの名前と作品の原画を掲載したタグがついています。タグを見ると、靴下のデザインに作品を使用していることが一目瞭然。作家の表現をリスペクトするTabioのこだわりが詰まっています。

H TOKYO ショップでも紹介!



東京駅に隣接する商業施設「KITTE」の3階にあるH TOKYOのショップ。トリプルコラボのプロモーション期間には、同じデザインの靴下と一緒に展示され、目を引くディスプレイになりました。もちろん、同フロアのTabioでも、H TOKYOのハンカチが紹介!

アーティストの作品を一挙公開!



全国の障害のあるアーティスト78人が登録されているエイブルアート・カンパニー。登録アーティストは、毎年公募により更新。登録作品数は7,401点にもおよび、それらはすべてWebサイトで公開しています(2013年10月現在)。
<http://ableartcom.jp/alist.php>

! わたしたちも参加しています!

「あたらしい角度でものづくりができました。」



岡田洋一 株式会社 三越伊勢丹 肌着・靴下バイヤー

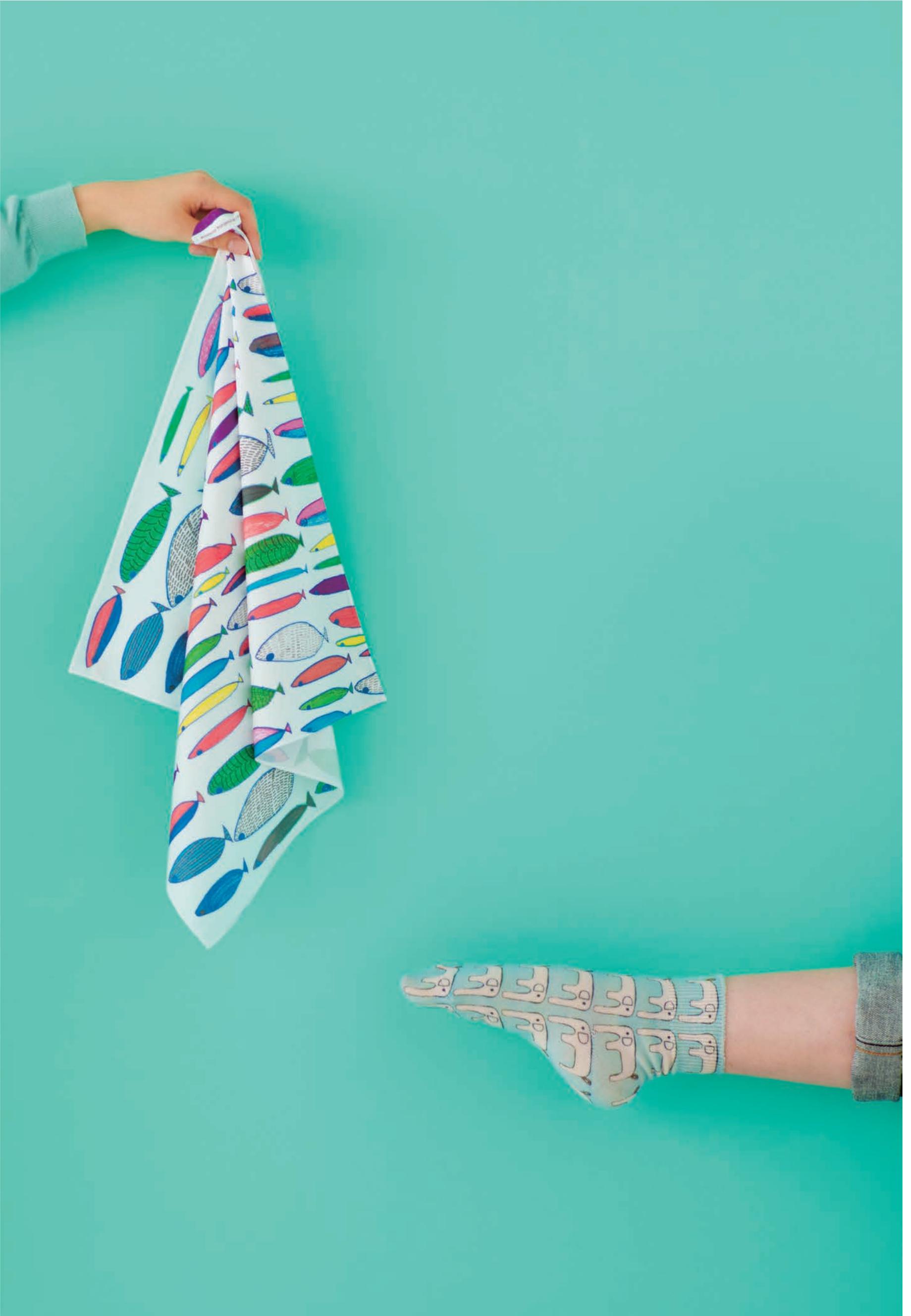
異なる商品を製作するTabioさんとH TOKYOさんと、「一緒のデザインにしたらおもしろいよね」と、同じデザインを使った靴下とハンカチができました。想像を超える発想力や色づかい、純粋でかつ楽しさがにじみ出るAACの作品たちは、お客様に「身につける楽しみ」を与えてくれています。各社に共通するのは、「ものづくりの確かさ」と「チャレンジ精神」。今回のコラボを通して、あたらしい角度でのものづくりができたことをとても嬉しく思います。

「僕が描いた絵が、商品になってうれしい!」



清水敬太 エイブルアート・カンパニー所属作家

プロフィール:2007年より「まちの工房まどか」に所属。2012年春から通っている作業所で、シルクスクリーン用のイラスト素材として、モノクロの筆ペンでぬいぐるみなどを描きはじめる。同年夏に同所のカレンダーに採用されたことから、自らも進んで描くように。秋には、作業所側が絵を描くことを作業に取り入れ、マーカーやテンペラ絵の具を使いながら、本格的に絵画活動を始動。今回のトリプルコラボでは、「パオストラップ」の作品が商品化(表紙とP.4に掲載)されている。







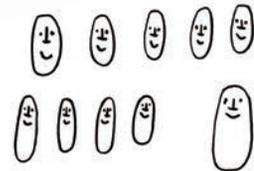
File 02 伝統技術と障害のある人の表現による新しい製品の開発

株式会社サヌイ織物 × NPO法人まる

博多織織元

障害者の福祉事業所

2011年に博多織の織元、サヌイ織物と障害のある人たちの表現を社会にアウトプットしているNPO法人まるのコラボレーションにより完成したブランド「marugococi」。



▲ NPO法人まるが運営する、福祉事業所「工房まる」所属作家による3種のイラストを商品化。《わたりどり》、《まゆちゃん》、《いちご》のイメージをモチーフに、2色のバージョン違いをつくり、風呂敷(サイズ2種)、チーフ、ネクタイ、ランチョンマットなどへ展開しています。

photo: Kouda Masahiro

伝統工芸とアートのコラボレーション！ 讀井さん、平田さん、樋口さん、どうやって実現したんですか？



株式会社サヌイ織物 代表取締役社長 讀井勝彦さん 1949年創業の株式会社サヌイの三代目。小物だけでなく、スーツやドレスなどアイデア商品で博多織を盛り上げる



株式会社サヌイ織物 意匠・企画室長 平田央さん NPO法人まるとの企画実現を可能にした発起人。これまでサヌイ織物の企画をいくつか担当している



NPO法人まる 代表理事 樋口龍二さん 福岡を中心に、障害のある人たちと社会をつなげるコーディネーターとして活動している。

——株式会社サヌイ織物とNPO法人まるが商品化を行ったブランド「marugococi」。第一弾の「INORI」から発展し、感性学専門の大学教授やデザイナーなど、さまざまな人を巻き込んでブランディング。2年かけて話し合いを重ね、商品をつくりました。今回、その過程をふりかえり、それぞれが開発に込めた想いをお聞きしました。

Q1 本プロジェクトに携わるようになったきっかけを教えてください。

平田:2009年末に、NPO法人まるの樋口さんの講演をお聞きして、その後、工房まるの作家さんをご紹介いただいたんです。原画も見せていただいて、それが非常におもしろい線なんです。しかも、かわいらしく描かれた動物たちの絵を見て、これを博多織にしたらおもしろいと、後日樋口さんに連絡したのがはじまりです。

樋口:僕は、もともと着物が好きで、博多織の大ファン

なんです。今回、お話をいただいて、若い世代の人たちにはあまり伝えられていない博多織と、障害のあるアーティストがコラボレーションすることで、新しい流れができると期待しました。また、デザイン面でも連続性のある柄を織に展開する構想があって、これはおもしろいものができそうだなと。

讀井:サヌイ織物は、博多織の着物だけではなくて、父の代から帯などの小物づくりにも積極的でした。私の代でも伝統にあぐらをかかず、また、元気のない博多織業界の現状を変えていきたいという気持ちもあって、この企画に足を踏み入れました。

Q2 「marugococi」はどのようにつくられたのでしょうか？

讀井:第一弾のコラボレーション企画「INORI」を2010年秋に発表した後に第二弾の企画としてスタートしたのですが、結局そこから2年もの時間がかかりました。ただ、その期間中に、九州大学の坂口

先生やデザイナーの野呂さんほか、さまざまな方に参加いただけたことで、より魅力的なプロジェクトになったと思います。

平田:「INORI」では、自分たちの想いを伝えることに注力しました。この「marugococi」では、商品がもつ物語性を感じてもらい、それによって商品を使う人が豊かになる、ということを実感できたと考えていますね。

樋口:サヌイ織物さんとテキスタイルをつくることは、はじめに決まっていたから、そこに制作側のどんな想いを乗せるのか、何を提案するのか、考えるところからブランドコンセプトが育っていったように思います。そのプロセスを経たことで、コラボレーションする意味を感じることができましたね。

Q3 コンセプトを育てるなかで、それぞれが共有できたものとは何でしょう？

樋口:博多織って直線的な柄が多く、世間からは“粋”という受け取られ方がほとんどです。加えて献上品という歴史的な流れもあるので“高級品”という敷居の高さや男性的なイメージも強くありました。しかし、試作品ができて、はじめて見せてもらったとき、プロジェクトメンバーからは「かわいい〜」という声が出た。障害のある人たちのゆるくて曲線的なイラストが入ったことで、ガラッと変わったんです。新たな価値が生まれたような気がしましたし、これからの可能性を感じましたね。

讃井:博多織は、伝統工芸品のひとつとして「和装」というジャンルに入れられがちです。そして、伝統工芸全般に言えますが、後継者不足に加え人気も下火になっている。そんな状況で、売れる見込みがあるかわからないものをつくる、というのはリスクが大きい。ただ、私たちが普段から考えている「今の生活に合ったものづくり」をすることと近いものを、「marugococi」のコンセプトに感じていましたね。

樋口:プロジェクト開始当初は、個人個人の見えない願望みたいなものはあるけれど言語化できない状況が続いていました。そんななか、ディスカッションを通して絞り出すように共有したのは、「物売るのではなく、物語を売る」というコンセプト。風呂敷で贈り物を包み、それを持ち歩くことに喜びを感じてほしい。そういった小さな行為一つひとつが、生活を豊かにするのだと話しましたね。ただ、それが売上に直接つながるのかという点はまだ違う。

平田:そうですね。コンセプトがしっかりとしていても、それを伝えるための努力も必要だと話しました。それは、たとえば、ロゴが入ったタグをつけるといった商品の見せ方の部分でかたちになっているんです。

Q4 コラボレーションを実施してみて、どのようなことを感じましたか？

樋口:障害のある人たちと活動していて、今までは寄付される側の人間として見られることが多かったと思うんです。けれど、前回の「INORI」は、売上で動物保護団体に寄付することが最初の目的として

ありました。絵柄で絶滅危惧種の動物を描き下ろしてもらったんです。それも、サヌイ織物さんが社会貢献として善意と一緒に仕事をするスタンスではなかったのが自然で良かった。また、コラボレーションすることで、障害のある人たちの成果がほかの世界で役立っていることに気づくことができ、自分の役割を実感できたことが大きかったですね。

讃井:今回のプロジェクトでは、社会貢献という感覚はなくて、対等の立場でものをつくっているのだと改めて感じました。この業界に長くいますが、自分たちだけで儲ける、ひとつの会社だけが育っていく、そんな時代はもう終わったのかもしれないと思いましたね。

平田:私も樋口さんと似た感触を持っています。福祉の世界自体を勉強することからはじまり、同年代でさまざまな活動をされている方と一緒に、ものの根本的な価値や、自分たちが風呂敷をつくることの意味、商品がもつ物語性について、しっかりと話すことができ、とても刺激的でした。

Q5 今後の展開・期待していることをお聞かせください。

樋口:縫製した商品だけではなく、生地として新たな展開ができたらいいなと思っています。たとえば、手づくりの帽子屋さんや、若手のバッグ職人さんと、小さな規模でも手を組んで、新しい商品をつくるなど。じわじわとファンも広がっていますから、同じように異業種のメーカーさんとコラボレーションする、ということも可能性を感じますね。

平田:そうですね。今回はコラボレーションしたからこそ、新しい価値が生まれたのだと思います。実際に手を動かされた織手の方からも、「かわいいからほしい」というご意見をいただいています。外側からも内側からも、そういった声を聞くことができますから、継続して何かできそうな感触ですね。

樋口:商品の売り方も考え方も、今は試行錯誤しながらも少しずつ前へ進んでいる感じがしています。ただ、大事なことは継続して発信していくこと。サヌイ織物さんだけではなく、当法人からも発表したことで、興味を持っていただける人たちの幅も増えている。次の新たな展開も考えられるのではと、わくわくしています。

Good Job! 実現のポイント

1. 伝統を大切にしながらも新しいものにチャレンジすること。
2. じっくりコンセプトをつくる
情熱と想いがあること。
3. “社会貢献”という感覚ではなく、ものづくりを対等に行うこと。

8 TOPICS

「marugococi」のコンセプトを伝える展示発表会



photo: anabana

2013年4月の展示発表会では、日本舞踊家、スタイリスト、手芸家、料理人など8名の方々にmarugocociの商品展開や日常で使用する実例などをご提案いただきました。また、実際に使用する過程を撮影し、ユーザーの“気持ち”や“心地”をとらえた映像作品を上映しました。

心地良さを生むための織り方の工夫



photo: Road Izumiyama

風呂敷に求められるしなやかさを確保するため、生地が厚く硬くなりすぎない糸の本数(色数)と密度を検証。ポップな絵柄をそのままに、織り方を変えることで輪郭線や濃淡を表現。何度も織り直して出来上がった絹100%の風呂敷は独自の光沢感をもっています。

さまざまなコミュニティとアートをつなぐ



アートを活動の柱として、行政や企業、教育機関、カフェやバーなどのコミュニティと協働する工房まる。九州大学グラミン・クリエイティブ・ハウスの建物内壁面に描いた学生とのコラボレーション作品は、その後同施設内の研究センターのロゴ、サインやWebサイトなどに展開しました。

！わたしたちも参加しています！

「たくさんの人と息長く、「marugococi」を育てる。」



坂口光一 九州大学大学院教授 / NPO法人まる理事

“もの”をつくるのではなく、“もの”をとおして、人の“気持ち”や“心地”を伝え、共有しあうことをめざしたいと考え、活動しています。今回のプロジェクトにあたり、参加された方々の想いを紡いでいくプロセスは山あり谷ありで、とても長い時間がかかりました。ただ、その想いを託した言葉“marugococi”と巡り会えたことは一番の成果です。まだはじまったばかりですが、これからたくさんの人と一緒に、息長く“marugococi”を育てていきたいです。

「“想い”“過程”をデザインし、新しい価値観を提供したい。」



野呂英俊 株式会社イングラ / HIQU DESIGN代表取締役

“折り”“福祉”“環境”“織る”など複数要素がある「INORI PROJECT」。第二弾からは、デザイナーである私や教育機関が加わり、4団体によりプロジェクトがスタートしました。そこで私は、それぞれの想いや考え方をひとつに集約し、視覚化する役割を務めさせていただきました。プロジェクトに携わる上では、つくる人、買う人、届ける人、受け取る人の“想い”や“過程”をデザインすることで、新しい価値観を提供したいという想いを大切にしていました。

株式会社サヌイ織物
http://www.sanui.info/
設立:1949年4月 本拠地:福岡
770年の歴史をもつ福岡の伝統工芸品、「博多織」の製品製造を手がける専門店。帯をメインとする博多織の商品から、先代より小物の製造をはじめ、財布やストラップ、名刺入の製造も行うなど、新しい挑戦を続けている。

NPO法人まる
http://maruworks.org/
設立:2007年3月 本拠地:福岡
1997年、福祉作業所「工房まる」として、アートを軸に、人が「豊かに生きること」を探りながら活動を開始。2007年、法人化。「工房まる」の運営と同時に、障害のある人たちと社会をつなぐ対外的事業「maru lab.」の2つの事業を柱に活動が続いている。

Good Job! RECOMMEND

「Good Job!」な活動を紹介します!

オリジナルロゼット製作:大野紅

BOOK REVIEW

これからの
福祉や仕事を考える 3冊



SELECTOR
水野大二郎
[研究者]

Data 01: 楽しい掃除の仕組みが素晴らしい!

ゴミコロリ

／NPO法人スウィング [京都]

<http://swing-npo.com/>



「お掃除なんて、面倒くさい〜」なんて言わせない、とっても楽しい市民清掃活動が京都市・上賀茂地域を中心に展開しています! その名も、「美しい京都をより美しく」が合言葉の「ゴミコロリ」。障害の有無に関わらず、一市民として社会参加、社会貢献の場を広げようと、広範な活動を展開するNPO法人スウィングが企画・運営しています。ゴミレンジャーに扮したり、ゲストの参加があるなど、ユニークな仕掛けが盛りだくさん。みんな楽しそうに掃除をしていることが素敵です!

01



『建築家なしの建築』

著:バーナード・ルドフスキー 発行:鹿島出版社/1984年初版
かつて住まいは、住む人が自分でつくり、その集合が街をつくりました。建築家だけではなく、無名の人でも「つくる」ことができた」街の豊かさがわかる1冊。

02



『ようこそようこそ はじまりのデザイン』

著:graf 発行:学芸出版社/2013年初版
grafは不思議なデザイン事務所?です。建築や家具など、いわゆるデザインのみならず食や環境まで、「つくる状況をつくってきた」これまでをまとめた1冊。

03



『オープンデザイン 参加と共創から生まれる「つくりかたの未来」』

共著:Bas Van Abel, Lucas Evers, Roel Klaassen, Peter Troxler 監訳:田中浩也 発行:オライリージャパン/2013年初版
ネット上にある無数のデータが、世界中の人々をつなぎ合わせ、新しいつくり方をつくりつつあります。「使うからつくる」へ、未来を考えるための1冊。

活動団体からのコメント

やって楽しい、見て楽しい清掃活動をめざして、毎月コツコツ早5年。これからも「お金にとらわれ過ぎない、多様なJobのかたちをオモシロ・オカシク提案してゆきたいと思います!」
木ノ戸昌幸(NPO法人スウィング施設長)

Data 02: 丁寧なものづくりへの姿勢が素敵!

special mix

／わかばの家+あおぞらソラシード+ワークセンターほほえみ [いずれも新潟]

<http://www.specialmix.jp/>



石鹸やリネンウォーター、ストールなど、肌に触れるものは、自然環境にも優しいものを選びたい! それなら、素材にこだわった「special mix」の商品をどうぞ。「special mix」は障害のある人の所得向上と就業機会の拡大をめざし、新潟の障害者施設が中心となって2013年2月に生まれたブランドです。ブランディングやデザイン、広報の専門家のサポートを受け、品質向上や流通体制の整備に取り組み、来年2月には雑貨に加え、スイーツとアウトドアの部門が立ち上がります。質の高いものづくりが魅力!

活動団体からのコメント

「施設職員が主体となる」「メーカーになる覚悟を持つ」ことを大切にしています。今年は参加施設が3から14に増加。県外へも広がるとういなと思います。
本多佳美(NPO法人あおぞら あおぞらボコレーション施設長/special mix事務局)

3冊の本を選んだ理由

これからの就労支援のあり方を考えることは、「生活と制作の一致」はどのように達成可能か、という問いへとつながると思います。日本では昔、芸術と工芸は「生活芸術」として1つに統合されてきました。芸術は芸術のためだけではなく、生活と共にあったのです。しかし分業化がすすみ、芸術と工芸、つまり生活と制作は分断してしまいました。生活芸術とは、今風に言うと「デザイン」です。自分の生活をデザインすることや生活のデザインをすることによって、制作を再び自らの手に取り戻すことは可能なのか。Good Job!の活動をふまえ、デザインの過去、現在、未来を考えてみてはいかがでしょうか。

水野大二郎 / 1979年東京生まれ。現在、慶応義塾大学環境情報学部専任講師、京都大学デザイン学ユニット特任講師のほか、デザインに関わる多様なプロジェクトに従事している。

Exhibition information 障害のある人たちのARTと社会的なINNOVATION

Good Job!

TOKYO

2013.11/29 (Fri.)-12/1 (Sun.)
渋谷ヒカリエ 8F COURT
11:00-20:00

MIYAGI

2013.12/15 (Sun.)-12/17 (Tue.)
せんだいメディアテラス1F オープンスクエア
11:00-20:00 *12月(火)のみ16:00まで

FUKUOKA

2014.2/15 (Sat.)-2/17 (Mon.)
イムズB2F イムズプラザ
10:00-20:00

MESSAGE 森下静香 (Good Job!プロジェクト / 財団法人たんぼの家)

私たちは「アートを通して幸福で豊かな生活を営むことは、すべての人の権利」という考えのもと、1995年から「ABLE ART MOVEMENT(可能性の芸術運動)」に取り組んできました。この考えに呼応してくれた企業とこれまでさまざまなプロジェクトを行ってきました。トヨタ自動車と7年間34都市で63回開いた「トヨタ・エイブルアート・フォーラム」、近畿労働金庫と取り組んでいるアートプロジェクト「エイブルアート近畿 ひと・アート・まち」。そして舞台表現の可能性を追求した、明治安田生命との「エイブルアート・オンステージ」など。こうした企業との協働を経て、障害者アートと産業を結びつけるGood Job!プロジェクトがはじまりました。このプロジェクトの根底にあるのは共有価値の創造です。企業やコミュニティ、福祉、分野を超えてさまざまな人々とともに、新しい仕事のあり方や価値観を社会に提案していきたいと思えます。ぜひ、関心のあるみなさまのご参加をお待ちしています!

【Good Job! Document 01】発行日:2013年10月30日 発行元:財団法人たんぼの家 〒630-8044奈良市六条西3-25-4 Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501 E-mail goodjob@popo.or.jp URL <http://goodjobproject.com>
監修:Good Job!プロジェクト 編集ディレクション&編集:多田智美(MUESUM) 編集:永江大、坂本美幸(MUESUM) アートディレクション&デザイン:原田祐馬(UMA/design farm) デザイン&イラスト:廣田碧(UMA/design farm)
*本フリーペーパーは、右記の展覧会開催に際し発行されました。「Good Job!展」主催:財団法人たんぼの家 後援:宮城県、仙台市、福岡市 助成:日本財団、仙台市民文化事業団 特別協賛:コクヨファニチャー株式会社、トヨタ自動車株式会社 協賛:株式会社竹尾、九州ろうきん、タビオ株式会社、仲内株式会社、株式会社西山ケミックス、ハリウコミュニケーションズ株式会社、明治安田生命保険相互会社 協力:イムズ、渋谷ヒカリエ、NPO法人エイブル・アート・ジャパン、NPO法人まる

